内水試
かわら版 1

28

1977.6.3

霞ケ浦漁業の動向（1）

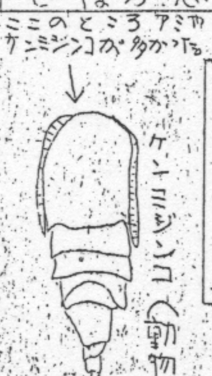
200カイリ時代の到来とともに、わが国の水産界は大変なあわただしさを示しております。日ソ交渉では北洋における漁獲量の大幅な削減を余儀なくされ大きな社会問題となっているのは新聞等で報道されたとうりです。また、魚価の急騰が問題となり、これらの魚が私達の食卓から遠のくのではないかと心配になって来ます。霞ケ浦の漁業は、これとは直接関係はありませんが間接的な影響は考えられます。すでに養魚飼料がキロ当り50円も値上りしており、これからの経営は仲々大変です。飼料会社の中には魚粉を多量に使う養魚飼料から手を引こうという動きさえあると云われています。勿論、養殖も漁家の所得向上に重要な役割を果して来たことも事実ですが、これを機会に霞ヶ浦の漁業を見なおし、将来に備えなくてはならないのかもしれません。

遠洋・沖合の漁獲量減がただちに沿岸や内水面漁業にはねかえって来るとは限りません。現在のところ量的に見ても小さく、又外国との貿易上の関係から輸入という手があるからです。しかし、私達の生活の中で最も重要な動物タンパクを自力で確保することは大切なことと思われます。日本の総生産は約一千万トンです。一方、内水面総生産は11万トンで1%です。このうち茨城の内水面が約3万トンで全内水面の30%を占めています。そのうち霞ケ浦では二万七千トンを漁獲しています。これは総生産の0.2%に当ることになります。

昭和49年	
総生産	975万トン
内水面	11
茨城内水面	2.9

蛋白供給あるいは、漁家所得の向上ということを考えるとき、この限界と考えられている2万トンをなんとか突破することができないかが最大の課題となります。勿論現在の霞ケ浦の資源がより有効に利用されて一般家庭へ運ばれる手順を作り出すことが、もっと重要でしかも、むつかしい問題かもしれませんが以下技術的、自然科学的側面から考えてみます。（つづく）

現在の水質


ここのところアミやケンミジンコが多かった
ケンミジンコ（動物プランクトン）

5月中旬頃から動物プランクトンが多くなって、5月25日頃から「水変り」の状態だったようです。透明度が一m五〇センチに上昇し、酸素量も低下しました。水温も20℃で風も適度に吹き、上下混合がおこり短時間の内に無酸素層は解消されています。水が緑になって透明度が一メートルぐらいにさがるまでは当分、このような不安定な状態が続くものと考えられます。

湖心の水質

水温 17.5
PH 7.9
透明度 1.3m
COD 2.1
5月25日

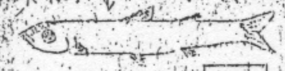
5月30日

	上	下
田余	5.0	5.0
玉里	6.4	2.3
八木蒔	5.1	4.2
柏崎	5.3	0.8
田伏	4.7	3.9
手賀	5.3	5.4
五丁田	5.3	5.2
三又沖	6.0	5.6
牛渡	6.5	6.3
木原	6.0	5.5
江川	5.9	4.7
三和	4.6	4.3
梶山	4.9	2.0
高田	5.5	5.5
井ハナ	5.4	1.8

CC/l（1.43を乗ずるとPPm）

酸素量の測定は右の地点について月、木曜日に行っています。結果はその日の2時頃わかります。結果を必要とされる方は[illegible]とかけて下さい。

ワカサギ放流完了



内水試で卵から[illegible]ワカサギが[illegible]なりました。百[illegible]が湖へと旅立ちました。（[illegible]）

茨内水試図

0324